

PRESENTED BY SHIRAIISHI JOUGI  
ILLUSTRATION AZURU

著 白石定規 イラスト あずーろ

# 魔女の旅々

THE JOURNEY OF ELAINA

特別書き下ろしSS

『このラノのはなし』

「イレイナさん！ おめでとーうございます！ 六位ですよ！ 六位！」

私がその国に泊まっつてから四日が経たった朝のこと。我が知人あるいは友人あるいは悪友であるところのサヤさんが狂喜乱舞きょうきらんぶしながらなぜだかいきなり現れました。

私は大層驚きましたし、戸惑とまどいましたし、けれど寝起きであるがゆえに色々とぼんやりとしていて、とりあえず欠伸あくびをしながら、

「なんであなたがこんなところにいるんですか」と彼女を見つめるに至りました。

「ぼくはイレイナさんを常に見守っていますので」即答でした。

なるほどどうやら彼女は我が知人あるいは友人あるいは悪友などではなく単なるストーリーカーきょうちだったようです。

何はともあれ旧知きょうちの仲の犯罪者予備軍ことサヤさんは、しかし寝起き時の私の虫の居所の悪さなど意にも介さず、「六位ですよ！ 六位！ 快拳かいぎよですよ！ ひゅー！」などどここれ以上ないくらいに浮かれておりました。□ぶりから察するに私が何か選ばれたようですが、私は番付をつけられるような物事に関わった記憶がないのですけど……？

「それで、六位って何のことなんですか？」

ゆえに率直そつちよくにお聞きした次第でした。

直後によくぞ聞いてくれましたとサヤさんは大いにうなず頷

き、

「この国で毎日行われているランキングにイレイナさんが三日連続で選ばれたんです！」

「ほう」「それはよいことです。」「で、何のランキングでっ？」

「この来訪者の可愛かわいさが凄すごい！」ランキングです」「

「この来訪者の可愛さが凄すごい」

「通称このラノです」

「このラノ」

どこかで聞いたことがあるようなないような妙な感覚がする略称ですね……。というか略すところおかしくありません？ まあいいですけど。

「名前から分かるとおりこれは来訪者の可愛さを毎日ラ

ンキング形式で紹介する代物として、イレイナさんはこの国に入国してから毎日このランキングにランクインしてるんですよ。しかも三日連続でランクアップ！ ほら見てください！ ほらー！」

ぐいぐいと迫るサヤさんは、そして三日ぶんの新聞記事の切り抜きを私のベッドにポイと置きました。

読みました。

『二十位 灰はいの魔女のイレイナさん』『九位 灰の魔女のイレイナさん』『六位 灰の魔女のイレイナさん』

なるほど確かに三日連続でランクインしていますし三日連続で上位にぐいぐいと迫っておられるように見えます。

しかし私の顔は恐らくこの切り抜きを見た直後から、消えかけていた寝起きの機嫌の悪さがふつつつと蘇よみがえってしまいました。

「あの……これ、どういことですか？」  
私は切り抜きをずい、とサヤさんに押し返します。  
そこには恐るべきものが映っていたのです。

この国初日、二十位として紹介されている私の紹介文の横には、入国直後に目を輝かせながら街をふらついて  
いる私の写真。二日目のものには喫茶店きっさてんでぼんやりと佇たたずんでいる私の写真。三日目の今日の新聞には占い師の真似事をして金儲けをしている最中の最低のくそやろうとしか言えないような下卑げびた顔をしている私の写真。

なんということでしょう。

私はこの国に来た直後から何者かに陰ながら盗撮とうさつをされていたのです。

「この国では旅人を見かけたら写真を撮ってもよい、というルールがあるんです」

「なんですかそれこの国犯罪者予備軍だらけじゃないですか……」

「おっと、でも問題ありません。ご安心ください」「どんと胸を張るサヤさん。「これ全部ぼくが撮ったやつなんです」

「別の問題が発生しましたが」

やべーやつじゃないですか……。

嘆息を漏らす私でした。

しかし私が問題視しているのはこのいかにもな盗撮写真だけでありません。

「ところでこのランキング、有識者からのコメントがあるようなのですけど」

ずばん！ と再び私はサヤさんに紙切れを押し付けます。

読み上げて差し上げましょう。

「初日。『見た目の美しさはさることながら、内面から溢れ出る気品がグッド』『可愛い』『とにかく可愛い』『可愛すぎてヤバイ』『未来の女神』などなど」

「褒めちぎられていますね。……で、これのどこが不満な



「んですか？」

「当然のこと言ってるだけじゃないですか」

「うわ……」

「……冗談です」

「サヤさんに引かれるとは……。」

「気を取り直して二日目の記事を読み上げましょう。」

「『見た目の美しさはさることながら、内面から時々  
ぞくぞくする一面がグッド』『可愛いけどどちよつと毒があ  
る』『とにかく可愛いけど毒がある』『可愛いけどなんか  
性格が怪しい』『未来の女神……？』『』」

「なんか疑問符まみれですね」

「疑問符まみれなのに順位が上がってるってどういふこ

とですか」

「イレイナさんの性格の毒っぽさより可愛さが勝ったというのでは」

「おやおやそれはそれは……照れますね……」

「そのわりにはドヤ顔なのが気になりますね……」  
それはさておくとして。

さてそれでは三日目といきましよう。  
これが一番の問題です。

「『見た目の可愛さはもはや語るまでもないが内面は腐くさっているというほかない』『ゲスい』『とにかくゲスい』  
『未来の魔王』」

「もはや悪口しか書かれてませんね」

「これでどうして順位が上がってるんですか……」

「なかなかマニアックなファンがついたようですね。これは四日目も期待大ですね……」

「もう外出たくないんですけど……」  
写真撮られそうですし。

何ならこのまま丸一日引きこもりに徹して目立たないように慎ましく生きたいくらいです。

「あー、でもイレイナさん。四日目も新聞に載ることはもう決まってるんですよ」

しかし日陰者ひかげものに徹しようとしていた私に、彼女はひどく軽い口調のまま、言いました。

このように。

「実は三連続でランキング入りを果たしたので、コメントをもらってきて欲しいと新聞社から頼まれてるんです」

○

というわけで。

そんな流れで。

「……いや、でもサヤさん。私、こっぴどいコメントとか慣れてないんですけど……」

「ちなみにイレイナさんの魅力がたっぷり詰まったコメントにして欲しいとの希望です」

「慣れないうえにいきなりハードル上がりましたね」

「大丈夫ですよイレイナさん！ さっき読んだ新聞記事の通り、街の人たちはわりとイレイナさんがクズなことをしていても寛容かんようなので何を書いても受け入れてくれます！ イレイナさんの素の部分そのままコメントに表せばいいんですよ。それがイレイナさんの魅力になるんです！」

「と言われましても……」

「ではぼくに任せてください！ お教えしましょう。イレイナさんの魅力というのはまず——」

「あ、長くなりそうなのでそういうのは結構です」

「むー」頬ほおを膨ふくらませるサヤさんでした。

しかし、私の素すの部分ですか。

「……………」

私は考えました。

素の部分。いつもの私。要するにいつもの習慣を私のコメントに織り交ぜれば良いわけですね？

ふむふむなるほど。

「お決まりで？」

私の表情から何か読み取ったようで、サヤさんは首をかしげておいででした。

私も頷うなずきます。

「まあ、なんとなくは」

決まれば早いもので、私はペンをとると、そのままさらさらと書き始めました。

そしてコメントをあっさり書き上げたのでした。  
曰く<sup>いわ</sup>。

『最初は20、その次9、そして6、この数字が何を意味しているのか——分かりますか？ そう、私（の順位）です』

「こんなんでどうでしょう？」

「したり顔が透<sup>す</sup>けて見えるコメントですね」  
「ですね。」

そしてやはりしたり顔を浮かべながら私は言うのでした。  
「これが素の私です」

「きっとこれは、長い長い恩返しなのです……」

ほうき星が夜空をかけるとき、  
少女たちにちよっぴり悲しい奇跡が訪れます。

再会と別れのシリーズ第8弾 !!



GA ノベル 『魔女の旅々 8』

大好評発売中 !!

定価：本体 1,200 円+税